

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ソーシャルなるものとは何か

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4340">http://hdl.handle.net/10502/4340</a>



特集

# 接合と連帯の人類学

現代世界に生きる人びとは、何に共同性をもとめ  
どのようなつながりに社会を見出しているのだろうか。

「自立的な個人から構成される社会」という

近代的<sup>ソシアル</sup>社会概念を問い直す。

責任編集 **森 明子**

# ソーシャルなるものは何か



社会的弱者が多く住む街区でおこなわれる「スープに国境なし」という催しの一場面。この催しでは、いくつものアソシエーションが屋台でスープをふるまい、その味を競う。会場の一角では、失業者やアルコール依存者が憩う。(ベルリン、2005年)

森 明子 文・写真  
もり あきこ

研究戦略センター教授。  
専門は、ドイツ、オーストリア社会を中心とした文化人類学。  
著書に、『民族（近代ヨーロッパの探求10）』（共著、ミネルヴァ書房、2003年）、『ヨーロッパ人類学—近代再編の現場から』（編著、新曜社、2004年）、論文に、「大都市と移民——ベルリンにおける外国人カテゴリーと多文化意識」（『国立民族学博物館研究報告』30（2）、2005年）などがある。

## はじめに

現代世界に生きる人びとは、何に共同性を求めて、どのようなつながりに社会を見いだしているのだろうか。本特集は、現代の社会科学が共有するこの課題への取り組みとして、民博で2006年10月からおこなわれている共同研究「ソーシャル概念の再検討——ヨーロッパ人類学の問いかけ」の成果を、中間的な段

階で紹介するものである。

共同研究が目的として設定していることは、近代の社会についての概念を問いなおし、現代社会を記述分析していく方途を、ヨーロッパの人類学研究として、事例研究をとおして探ることである。19世紀にヨーロッパで成立した社会科学は、「自立的な個人から構成される社会」を強調してきたが、実際のヨーロッパ社会は、市民の範疇からはみだしてしまう多くの個人を包摂している。この社会を、ヨーロッパ人類学はどのように描いていくのか、この問いが研究の出発点にある。

社会のありようを描きだそうとする文化人類学者たちは、コミュニティを媒介として社会をとらえようとしてきた。このコミュニティという概念をめぐる、最近、いくつかの議論が出されている。

小田亮は、コミュニティ（共同体）概念の脱／再構築の必要を論じる。小田の主張は、およそ以下のようにまとめられる。19世紀の社会学において「失われたものとして発見された共同体」概念は、市民社会や公共性に対置されているが、この対立自体、西洋近代的なオリエンタリズムの機制によって作りだされたものである。文化人類学は、比較的小規模な集団の調査研究をとおして、人びとが生きている日常は、そのような二元論的な図

式からはみだしていることを明らかにしてきた——小田はこれを「固定的なアイデンティティと結びつかない共同性」と表現する。そのような「生活の場における実践の論理」をふまえたコミュニティ概念を再構築する必要がある（小田2004）。

タイのエイズ自助グループを「実践コミュニティ」として描く田辺繁治は、小田の議論に、ミシェル・フーコーの「統治」という視点を加えて、「近代性のなかのコミュニティ」をとらえることを提唱する。人びとが対話と活動をとおして形成していく「公共的なもの」とは、田辺によれば、コミュニティのハビトゥスに立ちかえりながら、変動する状況で共有されるべき生の意味を問い、新しい秩序を作りあげようとする、解釈学的、再帰的な知と実践である。この公共的なものは、「主体が自己の統治に向かうベクトル」と、「主体が外部との連携をとりつつネットワークを形成するベクトル」に支えられながら立ちあがってくる。人類学的なコミュニティ概念は、このふたつのベクトルを射程に含むべきである、というのが田辺の主張である（田辺2005）。

小田の議論も田辺の議論も、方法と対象としてのコミュニティ概念を、文化人類学の他の隣接科学に対する特徴として、批判的に検

討し、ポストモダン以後の文化人類学研究の道筋を示そうとしている。私たちの共同研究はこの問題関心を共有し、近代がつくられ再編されていく過程について、とくにヨーロッパというフィールドの事例研究を積み重ねることをとおして、議論を起こしていこうとする。

## ソーシャルという概念をめぐる

現代世界における共同性の探求という問題関心を、この研究会では、「ソーシャル」という概念との結びつきにおいて検討しようとする。ソーシャルという語は、日本語では「社会的」と訳されるが、ヨーロッパのソーシャルは日本語の「社会的」が含まない意味を含んでいる。

たとえば、ドイツの憲法にあたる基本法はドイツ連邦共和国を「民主的かつ社会的（ソーシャル）な連邦国家」と規定し、フランスの現行憲法はフランスを「不可分の、世俗的、民主的、社会的（ソーシャル）な共和国」と規定する。この場合「社会的（ソーシャル）な国家」は、日本語の「福祉国家」にあたる。

ただしソーシャルという語は、社会福祉という意味を含みながら、それとは異なる意味も含んでいる。社会学者の市野川容孝は、「社会的（ソーシャル）」という言葉の意味を、他の言葉との対立／差異から整理して、4点にまとめている。第1は「自然」の対立項として理解される社会的なもの、第2は「個人」と対置される社会的なもの、第3は「国家」との対比で語られる社会的なもの、第4は「福祉」国家を社会的な国家と表現するときの社会的なものである。とくに日本では欠落している第4の社会的なものに、第1から第3の意味が重層的に折りこまれていることを、市野川は強調する（市野川 2006: v-x）。

ソーシャルという語にはふくらみがある。それを私は、ベルリンの調査で実感した。ある女性の話聞いていた。2時間ほどして話の区切りがついたとき、彼女がふと口にしたのが「あなたの仕事はソーシャルなものか？」ということばだった。トルコ出身の女性で、ベルリンの家族にも、故国の親族にも、問題をかかえていた。そうした話を私に語って聞かせた後のひとことであり、自分の経験を、誰がどのように聞くのか知りたかったのだと思う。彼女のことばを訳せば、「あなたは社会福祉にたずさわる人間か？」でまちがいないだろう。

回答は「ノー」である。私が社会福祉に携わる者でない以上、「イエス」と答えれば嘘に

なる。だが問題は「では、何か？」ということだ。こう自問して、私は戸惑った。「研究者である」では、まっとうな答えとはいえない。「研究者として話を聞くことは、ソーシャルではないのか？」という問いが頭をもたげた。

研究者としてソーシャルな関心をもっている、というようなことを、私はそのとき彼女に説明しようとした。だが、うまくいかなかった。私のことばは曖昧で、自分がひどくいいかげんな人間に思えた。

彼女の問いは、いまや私の問いになった。問題はふたつある。ソーシャルとは何を意味するのかということと、私の仕事はどう配置されるのか、ということである。このふたつは微妙に絡みあっている。

市野川によれば、ソーシャルという概念はルソーにさかのぼる。ルソーの『社会契約論』は、「自然が与えるあらゆる差異＝不平等を超えて、人間のあいだに平等を創設すること」を説くもので、平等の創成に向けたこうしたいとなみを、ルソーがソーシャルな契約と名づけたのである（市野川 2006: 100）。したがってソーシャルという概念は、平等や連帯という価値を志向する規範的な概念である。だが、社会学は「価値自由」という原則を自らに課すことによって、ソーシャルという言葉から規範的要素を削ぎおとし、抽象化してきた（市野川 2006: 35）。市野川は、いまこそソーシャル（社会的）なものの概念を再検討すべき時期であるという。この市野川の認識は、現代社会の共同性を問う社会科学者の関心と、呼応するところがある。

私は、このヨーロッパにおけるソーシャルという概念を経由して、最近の議論において公共性とよばれている問題系への回路を切りひらくことができるのではないかと考えている。田辺は、前掲論文において、実践コミュニティにおける主体構成というテーマを批判的に検討し、統治という考え方を經由して、公共性の議論へ展開することを試みている。また小田は、「公共性」は「共同体」と対になってつくられた概念であるとして、共同体概念を再構築することから問題に接近する回路を開



「ブンテス・クロイツベルグ」の一場面。清掃をひとやすみして、参加者のひとりが語りをはじめ、みなが耳をかたむける。語り手はドイツ人の老人、聞き手は移民の女性や子供たちである。第二次大戦後、このあたりが瓦礫の山であったこと、瓦礫の中から印刷機械の部品を拾い集めて組み立て、父の印刷工場を再開したこと、その瓦礫のなかで知り合った女性と結婚して、いまでは孫や曾孫が、南米やオーストラリアで生活していることなどが語られた。（ベルリン、2004年）

こうしている。ソーシャルも、近代の中から生まれてきた概念ではあるが、それはヨーロッパの日常生活世界の文脈に深く埋めこまれている。この語を経由しながら、他者との対話やケアの関係がつくられていくし、その関係のなかに共同性が見いだされて、また構築されていく。その実践的なプロセスを描きだすことを、この共同研究の議論の軸として設定した。

## 接合と連帯

この課題に取り組むとき注目するのは、人びとがどこに共同性を見つけだし、それを維持していくためにどのような戦術をめぐらし



「ブンテス・クロイツベルグ」の一場面。街区の清掃活動をおこなうトルコ系の少女。（ベルリン、2003年）



ソーシャルワーカーたち。実習生も含めて、彼らの家族の出身国は、ドイツ、トルコ、エジプト、ボスニアなど、多様である。現場で働くソーシャルワーカーたちは、頻繁に情報交換し、助けあう。(ベルリン、2005年)

ているか、ということである。地理的な空間をともしない人や共通の属性をもたない人のあいだにも、共同性が見つけたされ、維持されていることが明らかになる。日常生活世界における人びとの実践は、社会科学におけるコミュニティや市民などの概念からはみだすものであることが示されるわけである。そこで、どのような接合や連帯がおこなわれているか、ということが問題になる。

ここでアソシエーションというキーワードが浮上してくる。アソシエーションは、自由な連合にもとづく集団やその関係を意味する社会科学の基礎概念である。それは、固定的なアイデンティティや同質化と結びつくコミュニティの対概念であると同時に、孤独なアトム化した個人の対概念でもある。現代世界における共同性を、多元的で多様なアソシエーション的結合に読みとる研究者は少なくない。

たとえば社会学者の見田宗介は、個々人の自由を優先しながら他者とかかわる社会を構想し、それを「交響するコミュニンの自由な連合 liberal association of symphonic communes」と名づけた。見田がこの言葉で意図するのは、ひとりの人間がさまざまなコミュニティに多元的に帰属することを現実のものとすると同時に、その関係も一義的なものではないような関係のあり方である。そこには「同質化し、一体化する共同体の理想に対する、批判の意思がこめられている」(見田 2006: 181)。

付言しておく、前にとりあげた小田の議論は、この見田の見解を否定するものではない。

それを包含したうえで、コミュニティ概念を再構築しようとする、2段階の主張である。見田を含む少なからぬ研究者たちが、共同体という用語を放棄して、アソシエーションに未来性を見ようとするのに対して、小田は「これらの共同性を共同体と呼ぶことによって、それらを日常生活世界のなかに再び埋め込もう」と主張しているのである(小田 2004: 237)。

アソシエーションという語にも注意が必要である。現代世界における共同性のあり方を、多元的で多様なものとして見ることに異論はないが、楽観的にアソシエーションの未来性のみを論じるわけにはいかない。アソシエーションはきわめて多様である。たとえば同郷者団体、同好の士の集まり、同業者集団、自助グループ、あるいは政治団体など、何を契機にするかによってその性格は多様であるし、また、アソシエーション同士の連帯もさまざまである。近代において、アソシエーションが姿をあらわしてきた経緯も検討する必要があるだろう。それぞれのアソシエーションが、さまざまな接合をおこなっているわけで、歴史性も考慮したその過程こそが、人類学研究の課題になる。

アソシエーションを、国家と個人のあいだにある「中間集団」としてとらえることも可能である。フランスの中間

集団は、フランス革命によっていったん抹消されたが、個人と国家が直接対峙することは不可能であり、両者を媒介するソーシャルなるものが必要であることが再認識されて復活する。この認識が、デュルケム社会学の時代の背景になっていることを、真島一郎が詳しく述べている。真島の議論において、中間集団論とソーシャルなるものをめぐる議論は、ほぼ等号で結ばれる関係にある(真島 2006)。ソーシャルのこうしたとらえ方は、フランスの歴史と密接に結びついたものであり、それについては田中拓道のすぐれた研究がある(田中 2006)。

国家と個人を媒介するものとしての中間集団という視線は、共同性を多元的で多様なものととらえてコミュニティ概念を再検討する議論と矛盾するものではない。たとえば本特集の中川と石川の論稿は、多元的で多様な共同性をとらえようという立場からアソシエーションの接合と連帯を論じているが、個人と国家を媒介する中間集団という視線がそこには確かにかかわっている。また、大岡の論稿は、明らかな輪郭をもつ中間集団をあつかっているわけではないが、国家と個人の媒介という問題意識がライトモチーフになっていて、それが、目に見えない中間集団(あるいはソーシャルなるもの)を考える糸口になっている。

個人/市民というキーワードについても言及しておきたい。私がソーシャルなるものへの問題関心から個人/市民を問題にするのは、中川敏の表現を借りるなら、「人格(そして意図)は共同体性のなかに現れる」(中川 2002: 44)と考えるからである。どのような「人」の概念が構成されるかということは、共同性をとらえようとするアプローチにおいて、ひとつの焦点になる。



「スープに国境なし」の一場面。写真はトルコ人とドイツ人の女性によるアソシエーションの屋台。トルコのお菓子を準備している。(ベルリン、2005年)



農村の埋葬儀礼。故人が所属していたアソシエーションの代表者が弔辞を述べ、メンバーはユニフォームを身につけて、団旗をもって参列する。アソシエーションが村の外に広がる組織であることもめずらしくない。埋葬儀礼は、一時的にアソシエーション的結合の広がりをあらわにする機会である。(オーストリア、1992年)



合唱団は、趣味や社交の集まりとしての側面をもつ一方で、教会ミサと強い結びつきをもち、政治的な性格ももつアソシエーションである。写真は、村祭りの行列のなかの合唱団。(オーストリア、1987年)

この「人の概念」の延長線上に「市民」を配置して考えることができる。シティズンシップをめぐる近年の議論は、このような接合と連帯の人類学と政治学が重なりあう問題領域を構成している。たとえば文化人類学者のレナート・ロサルドラによる、マイノリティの権利獲得闘争に関するプロジェクトは、「文化的市民権」という概念をキーワードにして、社会関係のネットワークがいかに形成されるか明らかにし、そこからコミュニティとは何かを再検討する議論へと展開している (Rosaldo 1997; Rosaldo and Flores 1997)。

こうした議論は、近代の社会科学において基礎概念とされたものを問いなおしつつ、接合や連帯のそれぞれの局面に焦点をあてて、ソーシャルなるものを再検討するといふのみであるといえるだろう。私たちの共同研究も、このような問いのひとつとして位置づけられる。

### 特集の構成

この総論では、共同研究の問題関心について述べてきた。以下には、フランス、ドイツ、スウェーデンで進行している具体的な研究がつづく。これらについてかんたんに紹介しよう。

中川理がとりあげるのは、近代的「市民」概念からはこぼれおちる「否定的個人」を核とするフランスの相互扶助アソシエーションである。住民も参加し、既存のコミュニティとの接合がおこっている。中川はここで、アソシエーションニズムの理念と現実のあいだには逆説があるが、アソシエーションにおける

日常的な生活実践がその矛盾を克服しようとする遂行性をもっていることに注目している。

中川が取りあげるアソシエーションにおいて、ソーシャルワーカーの存在は重要な意味をもっていて、自発性の強制という問題も孕んでいる。このことを、たとえば田辺があつかったような自助グループと比較したとき、どのようなことがいえるだろうか。自己の統治に介入する公共空間や、ヨーロッパのソーシャルという概念をめぐる、議論が展開することを期待したい。

石川真作の論稿は、ソーシャルなるものをネットワーク形成から考える。トルコのマイノリティとして位置づけられるアレヴィーは、トルコ本国ではその集団としての輪郭が曖昧だったが、移民経験と移民先でのアソシエーション参加を経由して、アレヴィーとしての輪郭を獲得した。それはトランスナショナルな社会空間に、ネットワークの結節点としてコミュニティが形成されていった過程であり、顔の見える者同士の関係としてのアソシエーションをユニットとして、顔の見えない者同士が連帯し、しかもそれが政治的な発言の主体にもなっていった例である。

大岡頼光は、匿名墓地という場所に注目して、ヨーロッパのソーシャルを考える場合のひとつの焦点ともいえる社会福祉をとりあげる。これを大岡は、国家というエージェントを媒介にした「非人称の連帯」と名づける。大岡の分析で興味深いのは、老人介護や児童保育の広がりや匿名墓地が、ほぼ同時期に普及していったという指摘である。非人称の連帯と私的追憶が両立しようという観察も重要だろ

う。

福祉を再分配という視点から説明することはそれほどむずかしいことではないし、ケアやコミュニケーションという視点から説明することもある程度予想はつくが、「非人称の連帯」に人はどのような共同性を見いだすことができるのか、という問いに答えることは、容易ではない。このような試みを積み重ねていくことをとおして、ソーシャルという概念にアプローチしていきたいと考える。

### 参考文献

- 市野川容孝 2006『社会』（思考のフロンティア）東京：岩波書店。
- 小田亮 2004「共同体という概念の脱／再構築——序にかえて」『文化人類学』69(2):236-246。
- 田中拓道 2006『貧困と共和国——社会的連帯の誕生』京都：人文書院。
- 田辺繁治 2005「コミュニティ再考——実践と統治の視点から」『社会人類学年報』31:1-29。
- 中川敏 2002「危機に瀕した人格」『民族学研究』67(1):44-45。
- 見田宗介 2006『社会学入門——人間と社会の未来』東京：岩波新書。
- レイヴ、J、E・ウェンガー 1993『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』佐伯胖訳、東京：産業図書。
- Rosaldo, Renato. 1997. Cultural Citizenship, Inequality, and Multiculturalism. In W. V. Flores and R. Benmayor (eds.) *Latino Cultural Citizenship: Claiming Identity, Space, and Rights*, pp. 27-38. Boston: Beacon Press.
- Rosaldo, Renato and William V. Flores. 1997. Identity, Conflict, and Evolving Latino Communities: Cultural Citizenship in San Jose, California. In W. V. Flores and R. Benmayor (eds.) *Latino Cultural Citizenship: Claiming Identity, Space, and Rights*, pp. 57-96. Boston: Beacon Press.